

「開発」を問いなおす



人類学者
川田 順造

物質生活にかかわる技術の文化と、自然観や労働観などの価値の文化を不可分とみる「技術文化」の概念を編み出し、日本、フランス、アフリカ社会を長年の現地調査に基づいて比較する「文化の三角測量」を提唱してきた川田順造さん。

「世界は人間なしに始まったし、人間なしに終わるだろう」。自ら訳したレヴィ・ストロースの『悲しき熱帯』にある言葉を、川田さんは「開発をめぐるジレンマを包み込み、人類の思いあがりや静かに戒める、壮大なベシズムが込められている」と大切にする。時勢に左右されず、今起きていることの意味を長い目で見、広い視野で問うのが人類学者の役割と話す川田さんが、開発に抱く思いとは。

「学び合い、一緒に問題を 考えていくことが大切です」

人類学者

川田 順造

Kawada Junzo

1934年、東京生まれ。東京大学教養学科(文化人類学)卒業。パリ第五大学でアフリカ研究で博士号。JICAの前身、海外技術協力事業団(OTCA)派遣の専門家として、2年半ブルキナファソへ。アフリカとフランスで各通算9年間暮らす。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授などを経て、現在神奈川大学大学院教授。著書『人類の地平から(ウエッジ)』『人類学的認識論のために(岩波書店)』など、共編著『開発と文化』7巻(岩波書店)など。フランス学士院より大勲章(91年)、フランス政府より文化功労章(94年)、紫綬褒章(2001年)を受ける。国際開発学会で常任理事(「開発と文化」担当)を務めた。



photos by Suto Naotoshi

価値規準の単一化を疑え

1949年、トルーマン・アメリカ大統領は就任演説で、先進国から低開発国への政策的な援助を提唱しました。第二次世界大戦後植民地が独立し、東西対立が深まる中での、社会主義封じ込めのアメリカの世界戦略の一環でした。

「先進」「低開発」の関係は、15世紀末以降の西洋の非西洋世界への進出、奴隷貿易とアメリカ大陸の開発、19世紀から第二次大戦までの植民地支配の結果生まれたものです。第一次産品の供給地で製品の市場でもある植民地によって、宗主国は「高開発」になり、植民地は在来の農業や手工業を、宗主国の産業発展に従属させられ破壊されて、「低開発になった」のです。「低開発」は差別用語だからと「開発途上」と言い換えたりしますが、途上というほうが、早く私たちのようになれという、なおひどい、誤った価値の一元化です。ある国々が「低開発にされた」歴史の事実こそが差別的なのです。

第二次大戦後、世界を「開発」という単一の価値で見ようになり、初めは経済指標、後には人間開発指数(HDI)など共通の指標で国をランク付けするようになりました。けれども、多くは西洋近代に根差した指標によって、本来それぞれの価値観における人間性の発現であるべき「開発」や人間の幸福を、一律に測ることはできないはずで。

かといって、すべては相対的価値を持っているから放っておけばいいとは思いません。私が住んで

いた村で、夕方まで元気だった若い母親が夜中に急性髄膜炎になり、私の車で診療所へ運ぶうちに死んだ、アフリカでそんなつらい経験を何度もしました。村人が車や最新の薬を欲しいと思うのは当然です。ただ、ある制度や状況の良し悪しを自分の尺度で判断する前に、相手の生活と考え方の内側から問題を理解する努力が大切です。就学率や識字率にしても、就学や識字によって何を学び、何が失われるのかをまず問うべきです。外から持ち込んだ価値を、このほうが優れているのだと押しつけてはいけません。異なる社会に入って、それまで見えなかったものに目を開かれることは多いのです。問われるのは、こちらに学ぶ心と見る目があるかどうかです。

問題の同時代性

今世界各地で、同時代の関連し合うさまざまな問題が起きています。40年前に大量に植林した針葉樹を、コスト高で伐れず、経済効率を優先して外材を輸入する日本の状況が一方にあり、他方で日本に安い加工済み木材を供給するインドネシアの森林の乱伐と密輸出があります。それは同時に地球の、酸素供給源の破壊です。

「開発」について、どの国も模範を示す立場にはない。地球市民が一緒に問題を考え、学び合うしかありません。日本の近代化、戦後の経済発展を、成功談のように語るのはやめましょう。現地の人たちに教えようと思わず、相手から学び、共に考える心を。技術「協力」は、文字通り相互的なものだと思います。